

# 2173再構築2

エリー

むかし、あるところに、食料が取れるので、人が集まる場所がありました。

そこでは、毎日働いて、その日食べる分を手にすることがやっとでした。

だから、子どもを持つ親は、子どもが働けるようになるまで、自分の分を分け与えて育てました。

病気になったり、けがをしたり、働けない日は食べることができません。当然、どんどん弱っていきます。死んでしまうこともありました。

その状況をどうにかしたいと思ったある男が、何かを夢中で作り始めました。

家族は、何をしているのか分かりませんでした。あまりに真剣なので、みんなから少しずつ食料を集めて、男を信じて支えることにしました。

そしてある日、男は機械を作り上げました。

その機械を使えば、今までの何倍も食料を手にするができるようになりました。

誰もがその機械を欲しがったので、男は食料を得るために働くのをやめて、機械を作ることを専門に行うようになりました。生産力が上がったために、それが可能になったのです。

こうして、機械を作る人、機械を使って食料を収穫する人、余裕ができたので食料を得る以外に必要なことをする人に分かれていきました。

便利な機械の噂は遠くのほうまで広まりました。

多くの人々は、特別な何かと引き換えに、機械を作ってもらうことを望みました。

しかし、武力で思い通りに支配しようとする悪い人もでてきました。そんな悪い人から、機械を作った男を守るために、集落の人々が立ち上がりました。

こうして、武力がものをいう時代が始まりました。

力と力がぶつかり合う時代になると、一番強い人が王さまになりました。

機械を作る、機械を使うなど、特別な技術のない人は、立場が弱く辛い思いをしました。

だから、誰もが強くなること、賢くなることを求めて、頑張りました。

なかには、歌や物語で、人を楽しませることで、居場所を得た人たちもいました。

しかし、教えてくれる場所はないので、親がしていることを受け継ぐことがほとんどでした。そうでない道を選ぶことは、苦難が伴いました。

当然、親の仕事が向かない子どももでてきます。

もしも学ぶ機会があったなら、自分を生かせることができたろうに。

そう思った人たちが、学校を作りました。

学校でいろいろなことを学んだ人々は、支配されていることに気づきました。

そして、支配からの自由を求めました。

なぜなら、王さまはいつのころからか、自分の欲望を満たすために行動していて、国民のため

に行動しなくなっていたからです。

王さまが決めるのではなく、自分のことは自分で決める。

そういう自由が認められる世の中になりました。

とどまることを知らない機械の発達で、それを可能にしました。

世の中が自由になっても、必要なことをしなければならぬことは変わりありません。

しかし、必要なことより、好きなことをした方が楽しいです。

必要なことが好きならよいけれど、不要なことが好きならどうしたらいいのでしょうか。

興味のない歌を聴かされたら？

取引しないでしょ。

それでも歌いたかったら、歌うことはできます。なかには好きになる人がいて、むかし、機械を作った男を家族が支えたように、支えるファンが現れるかもしれません。誰からも相手にされなくても、好きなことをして死んだのなら、満足な一生なのではないでしょうか。

では、美味しくないお米を買ってくれといわれたら？

食料が足りないころは、うまさより、量が問題でした。しかし、生産量が上がって、量が満たされれば、必要なものを作ったからといって取引が成立するわけではありません。

好きなものを選べる豊かさは、提供側となるためのハードルを上げます。

では、安くしたらどうだろう？

一時的には売れるかもしれませんが、生活はどんどん苦しくなるばかりです。

生産量が足りない時は、生産量を上げることが、共通の目的でした。

では、少人数で必要以上を作れる生産力を得た今、何を目標にしたらいいのでしょうか？

個人の好みに合わせて、小ロット多品種を目指しても、需要のあるなしは博打です。

ニーズをつかんで、爆発的ヒットを記録する。センスと才能にあふれた人のところに、お金が集まる。しかし、それは一握りの人たちです。こぼれおちてしまった人は、誰でもできるが、誰かがやらなければならない仕事を引き受けるしかありません。もっと安い人件費の場所を求めて、それすら失ってしまうかもしれません。

自由になればなるほど、必要を満たす方法があやふやになって、「働きたいけど、何をしたらいいのか分からない」という問題が深刻になります。

競争に勝てばよいという話ではありません。選ばれなかった誰かが、確実に負けることが決まっているからです。その数は少なくないでしょう。いつ、誰がなってもおかしくない。

問題は他にもあります。

勉強することが目的になってしまって、働くことから遠ざかってしまった子どもは、働くコツが身につきません。

言い直すなら、勉強することを覚えたのであって、働くことを覚えたわけではない。しかし、勉強することを仕事にすることもできない。そういう問題がでてくる。

確かに、弱い立場の子どもに、安い賃金で、強制的に長時間、危ない仕事をさせるのは悪いことです。勉強する機会を与えられなければ、弱い立場から抜け出せないのも事実です。

しかし、大人に混じったチームの一員として仕事に参加する経験を積むこと自体は悪いことではありません。むしろ、指導する大人の中に将来の自分の姿を見つけられるのでいいことです。憧れれば選ぶでしょうし、拒絶なら他を探すでしょう。

目標が決まれば、漠然とではなく、具体的に必要なことを学ぼうとする。いつ、どう使うのか、わかります。

目標が決まれば、不要なことも分かります。どこまで学び続ければいいのか分からない不安から解放されます。全教科の成績がよくななくても、必要を満たせばよいのです。

-  
生産力が上がったこと自体は、悪くありません。

なぜなら、生産力が低いころは、病気やけがで動けない人は死ぬしかなかったからです。

機械を使うのをやめても、何にも解決しません。

しかし、今のままでは、必要なことが見つからず取引の外にもれてしまう人がでてきます。

誰が、何を、なんのために、どうするのか、秩序を問い直す必要があります。

-  
それをなぜ、わたしが考えるのか？

それは、理想世界を求めることが好きだからです。

ずっと迷ってきたけれど、好きなことをしていい自由な世界では、特別な何かがなくても、求めていいのです。お金にならなくても、趣味としてすればよいのです。

ただし、やはり、王さまがその地位を追われた理由になったように、自分に都合のいいルールを決めてはだめだと思います。みんなが納得して、うまく機能することが求められる。

気に入らないから粛清するとか、好きだから援助するとか、そういう決め方ではいけない。

では、どういう決め方がよいのか？

歴史はもちろん、哲学や宗教などに頼ることになると思います。直接的な道具としては、わたしの場合は西洋占星術やタロットです。

-  
日本に生まれ育ったわたしは、自然を神だと考えています。多神教的世界観を持っている。それは聖書を読んでも、変わらない感覚でした。

広大な宇宙も、木々も、魚や獣も、動物である人間も、自然の一部であり、聖なる存在です。

「生まれて、出会って、愛し合って、子孫を残して、死ぬ」という生き物が持っているサイクルを満たす労働に携わる人たちこそが、守られるべきものだと考えている。それは特定の誰かではない。血で選ぶわけではない。しかし、全員に強制することもしない。

なぜなら、聖なる存在として、節制を求められることが向かない人もいるからです。

また、みんなが食べるために働いていたときに、それを放棄して機械を作ることを考え、実行した男がいたからこそ、生産性の向上という悲願が達成されて死の恐怖が遠ざかったなら、好きなことを選ぶ自由もなければならぬ。

誰が必要なものを用意して、誰が使うのか？

自由に選べるのは誰なのか？

最初に覚えたことが生涯を左右してしまうなら、子どもを保護区に集めて生活産業や林業、農業に親しませ、13歳から15歳になったら管理区の寮に入れて工場勤務の経験を経て、「基本」を分かった上で、「選択の自由」を与える。保護区に戻るか、自由区で勝負するか、宣言させる。

保護区は、小さな集落に分かれている。それぞれの地域にあったものを生産して、物々交換する。

それだけでは足りない工業製品は、管理区で子どもを中心とした人々が生産したものを受取る。

管理区は、工場勤務をする子どもたちや、工場勤務は不可能と認められた弱者が保護されて暮らしているが、基本的に働く場所しかない。工場地帯であり、オフィス街でもある。

管理区の工場は成績優秀者しか残れない。研究者や管理者や技術者からなるエリート集団です。

保護区の人々が使う製品を製造するのに必要な材料を買うお金は、自由区で成功した人に出してもらおう。お金を出す代わりに、自由区のルールを決める権利がある。法律はあるが、運営するのはお金を出した人や、お金を出した人に託された人。

自由区は、東京と横浜がメインで、中継的な役割として、名古屋、大阪、博多が外国人にも開かれた自由な領域となる。自由区の一つで国際都市という。

子どもたちの労働力だけでは足りない部分を補う人たちは、保護区を維持するために集めたお金から賃金が支払われる。しかし、住むのは自由区なので、自由区のルールに支配される。

管理区に隣接する自由区の一つである国内都市は、生活産業と住宅街が中心となる。買い物したり、遊んだりできる。

自由区の管理・運営は、都市単位で行われる。保護区を維持するためのお金を払うことができない人は、ルール決定に参加できないから、「どの都市を選ぶか？」が選挙の役割を果たす。私利私欲に走って酷いことをすれば、人がいなくなる。そういう抑止力を期待している。

-

高い生産性を持ち、確実な需要があれば、計画的に必要な量を作ればよいので、長時間働かなくてもいい。あいた時間で、勉強をしたり、休養したり、遊んだりできる。

保護区の仕事も、長期的な計画に基づく、安定したもので、余裕があるものです。自由時間に、国土保護という目的に反しないことをして楽しむのは自由です。釣りとか、栗拾いとか、自然を楽しむ自由はある。ただし、平等の観点から希望者を集めて集団ですることになるだろうけれども。

お金を配るのではなく、衣食住を供給して、仕事を提供することで、働く意欲のある普通の人を守る。だから13歳から15歳の間に、工場勤務を経験して、卒寮した人なら誰でも保護区入りを認める。

理想は、一度自由区に出て競争に参加した後、技術を身につけて保護区に戻ること。

-----

想定しているのは、2173年ころの日本。

二つに分かれた世界で、どんなドラマが語られるのか、それはこれから考えます。

これは「2173再構築」では分かりづらいといわれたので、書き直したメモです。

「秩序を守るために制約を受けること」と「自由を認められて好きなことを選ぶこと」は、どちらも大切だけど、同時にはできない。だから「どちらを優先するかで、二つの区域に分けよう」と思った。その部分が伝われば、今は満足です。

「二つに分けたら、今度は何が問題になるか？」は、想像しきれてないので分かりません。

人物像がない。

理想とするケースも、波乱を起こすケースも、見えてない。

やっと世界像がぼんやり見えてきたところです。